シリーズ 城

特許審査第二部生産機械　山本 忠博

第二十五回　松前城

～軍学の粋を集めた･･･失敗作？～

日本で盛んに城が築かれた時期はもちろん戦国期から江戸初期にかけてですが、それから二百数十年後の江戸後期から幕末期にも城が幾つか築かれました。日本沿岸に異国船が出現するようになって、国防の必要に迫られたためです。そして、蝦夷地（北海道）でも北方警備のための城が築かれました。そのうちの一つが、日本式の城郭として再後期の城となる松前城です。

松前城の築城

ロシアは、江戸後期には千島列島を南下し、アイヌと接触していました。幕府は、当初、蝦夷地に藩庁を置く松前藩から大半の蝦夷地を取り上げて直接にこれに対しようとしますが、文政4年（1821年）に政策を変更し、松前藩に蝦夷地を戻して北方警備にあたらせました。その一環として嘉永2年（1849年）に松前藩に築城を命じました。

そうして、松前城は、当時の高名な軍学者の設計によって築城されました。この城は、松前氏の館を基とし、津軽海峡側からの艦砲射撃を想定して本丸から三之丸まで海側に向け、砲台を備え、城壁に鉄板を仕込み、また三重の天守の壁には硬いけや木の板を仕込んで、安政元年（1854年）に完成しました。寒冷地にあるため、屋根には、寒さで割れやすい瓦に代えて銅板を葺き、石垣には、解凍時に土が流出しないように隙間をなくす加工が綺麗に施されています。

ちなみに、幕末のほぼ同時期（1866年）に同じ北海道の函館に五稜郭が築かれますが、こちらは日本式の城郭ではなく、洋式軍学者が設計したイタリア発祥の星形要塞といわれるものです（第八回の函館五稜郭を参照。）。

軍学とは

ところで、軍学とは何かというと、江戸初期までにほぼ体系化された陣法、戦法に関する研究です。それまでの戦国期の戦の理論を、平和時にあっても有事に備えて継承する目的で学問化されました。

軍学は、江戸期を通じて幾つかの流儀が成立し、その多くが過去の武将の軍法を基にしているといわれていました。代表的なところは、武田信玄を流祖とする（と言い張っていた）甲州流や、上杉謙信の軍法を基とする（と言い張っていた）越後流などです。そして、これらの流儀が、自流の権威付けのために理論の基礎とした武将を盛んに宣伝したものですから、例えば信玄や謙信が必要以上に（？）英雄化され、さらには“川中島の戦い”（の俗説）までも捏造（？）される（第二十一回の海津城を参照。）という副産物まで生みだされました。

けっきょくのところ、江戸期の軍学は、実戦経験を伴わない机上の空論に陥ったものといえ、そのことが松前城の後の運命を決することになります。

戊辰戦争

さて、対ロシアの海防を意図して築かれた松前城ですが、結果として外国勢力との戦いに使われることはなく、日本人同士の内戦、いわゆる戊辰戦争の現場となります。その際に松前城に攻め寄せたのが、元新撰組の土方歳三の隊です。以下、戊辰戦争の概略と松前城の攻防戦について見ていきましょう。

・函館戦争まで

戊辰戦争は、幕末期の薩摩・長州を中心とする新政府軍と旧幕府軍との間の一連の戦いです。慶応4年（1868年）に鳥羽伏見の戦いにはじまり、江戸城無血開城、東北戦争、函館戦争と続きます。

このうち江戸城無血開城で旧幕府軍の中心勢力は新政府軍に降伏していました。しかし、これを不服とする旧幕臣の榎本武揚らは、土方歳三らの旧幕府軍の残存勢力を吸収しながら蝦夷地に向かいます。榎本の狙いは、旧幕臣による北方の開拓、防衛を天皇に認めてもらうことでした。とはいえ、新政府がこれを認めるわけもなく、結果として榎本達の旧幕府軍は新政府軍と全面的に戦うことになります。これが戊辰戦争終盤の函館戦争です。

旧幕府軍が上陸した蝦夷地には、新政府直轄の函館の五稜郭と、既に新政府に恭順していた松前藩があり、旧幕府軍はまず五稜郭を占領し、次いで松前城に向けて土方歳三の指揮下に700の兵を送りました。明治元年（1868年）のことです。

・松前城の攻防

旧幕府軍は松前城に降伏勧告の使者を送りますが、松前藩はこの使者を殺害し、徹底抗戦の構えを示します。守る側の松前藩士は400名で、もともと北方警備の準備をしていたため、戦闘意欲は高かったようです。これに対して旧幕府軍は、海上から艦砲射撃を行い、土方隊の700名で城の攻略を開始しました。

しかし、上述のとおり松前城は軍学の粋を集めた城であり、図1を見てもわかるとおり、大手門（正門）から本丸までの通路は曲がりくねり、いくつもの門を重ね、さらに侵入者を鉄砲などで側面攻撃し易い構造とされていたので、そう簡単に落とせるはずがないと思われました。

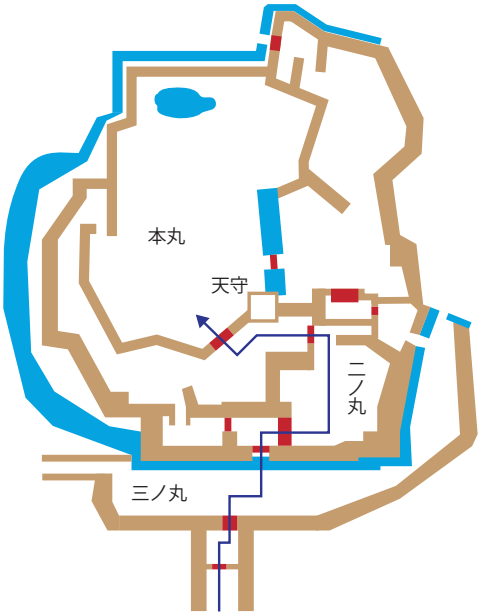

図1 正門からの侵入路

ところが、城はあっさり数時間で落ちてしまいました。それは何故かというと、土方隊が搦手門（裏門）から攻め込んだからです。

実をいうと、この城は、敵は正面から攻めてくるものと決め付けて設計されており、後面の防衛施設はないに等しく、図2のとおり搦手門からの通路は、侵入者が簡単に本丸に到達できる構造だったのです。この辺が、実戦経験のない軍学の限界だったのかもしれませんね。

と、ここまで否定的に書くと、さすがに松前城の設計者にも悪いので、一応のフォローを入れておきましょう。

松前城築城にあたって、その設計者は、海防上の見地からみてこの地では十分な防衛ができないので、函館に新城を築くべきとの上申を松前藩に入れていました。しかし、松前藩は、城の移転で町がさびれることや、予算の都合を挙げてこれを受け入れなかったという経緯があります。松前の地は、大規模な城を築くには狭く、最初から十分な防衛陣地を築けなかったという事情もあるにはあったわけです。

図2 裏門からの侵入路

・戦争の終結

さて、その後、新政府軍は、明治2年（1869年）に反撃を開始し、蝦夷地に上陸しました。旧幕府軍は、蝦夷地の各地で激闘を繰り広げて抵抗を試みますが、松前城を奪還され、次第に五稜郭に追い詰められていきます。そして、最後は旧幕府軍が降伏し、五稜郭を開城して戦争は終結しました（第八回の函館五稜郭を参照。）。

松前城の現在

戊辰戦争後の松前城は、明治政府の領有下での取り壊しや、1949年の出火によって、多くの建物を失ってしまいました。現在ある建物のうちで、創建当時のものは、本丸御門（現重要文化財）、本丸表御殿玄関、旧寺町御門（現阿吽寺山門）だけで、天守、搦手二之門、天神坂門は後に再建されたものです。

曲輪、石垣などはよく残っていて、その石垣には、戊辰戦争時の弾痕がなまなましく残っています。

城郭のファンのみならず、土方歳三のファンにとっても、おさえておきたい城ではないでしょうか。